追悼の辞

岡部政昭教授は平成四年十月六日、急逝された。四十八歳の誕生日を迎えられてから僅か五日目という若さであった。痛恨の極みである。

当日は大学院経済学研究科の入学試験日であった。岡部教授も試験委員として早朝より準備にかかっておられた。午前十時過ぎに、岡部教授の体の不調を知った研究科長が保健室に行くことを強く進め、責任感の強い教授は渋々それに従ったが、それが、われわれの岡部教授との最後の別れになってしまった。電話による主治医の指示に従い、自宅にある薬を飲むため帰宅したのが十時四十分頃、急を聞いて夫人が帰宅した時には、既に岡部教授の心臓は止まっていたという。夫人が病院から訃報を伝えてこられた時の驚きは到底文字に表し得ない。

岡部教授は秀才であった。不幸にして、小学生の頃心臓に欠陥を生じ、戸外で自由に跳び回ることは思うにまかせなくなったが、読書に明け暮れる少年時代を過ごされた。成城学園のすぐ近くにお住まいであったことから、通学の身体への負担を軽くする為もあって、高校・大学と成城に通われ、大学時代には学友たちと尾瀬に旅行するほど元気になられた。大学一年生の時、将棋部に入部して将棋を覚え、長足の進歩をとげて四段の免状を取るまでになっている。卒業後早稲田大学大学院に進まれ、博士課程を修了された後、成城大学経済学部（財務管理論担当）になられた。経済学部卒業生の専任教員第一号であり、われわれの期待を一身に集めての就任で

あった。就任に先だって心臓弁膜症の大手術を受けられ、「君の弁はだれのものよりも強くなったよ」と医師に太鼓判を押されるほど回復した。事実、顔色は見違えるほど良くなり、病気一つせぬほど丈夫になられた。ドイツに一年間留学されたが、何ら支障はなかった。私は、岡部教授の病気をすっかり忘れてしまっていた。訃報を聞いて、何度そのことを悔み、申し訳なく思ったことか。

岡部教授は昭和五二年に本学専任講師になられた後、五五年助教授、六二年教授、そして六三年からは経済学研究科教授も兼任された。就任以来、「証券市場の均衡と効率」「経営財務と企業理論」等の理論的研究、「麒麟麦酒とアンホイザーブッシュ」「モービル石油」等の企業研究、更に「国際化と企業財務」「外資企業の対日進出とその経営実態」等国際化時代の提起している新たな問題への取り組みなど、各方面に渉って精力的に研究を続けられ、多くの著書論文を発表してこられた。また、『西ドイツ財務分析論』『西ドイツ経営学の新潮流』など翻訳も数多くこなされている。ドイツの大学との共同研究に参加しておられ、平成四年十一月には、この共同研究の為本学の大森教授と共にゲッチンゲン大学等への出張が予定されており、既に準備はすべて整えられていたのであった。葬儀の後、大森教授は岡部教授の写真を胸に渡独された。

研究と教育に情熱を傾けられたばかりではなく、また、大学の運営にも岡部教授は熱心且つ緻密に取り組まれた。特に、最近は大学の教務委員、入試管理委員及び経済学部入試委員として煩雑な仕事を見事に処理してこられ、常に経済学科と経営学科の意思の疎通を計ってこられた。委員会等の相談に来られた時の、早口で、独特のつんのめるような話し方と、絶えることのない明るい笑顔が今も浮かんでくる。笑顔の裏にどれほどの疲労が隠されていたことか。今となっては、多くの仕事を強いたことを悔やむばかりである。

追悼の辞

教師としての岡部教授が学生の非常な尊敬を集めていたことは、訃報を聞いて学部長室に集まったゼミ生たちがゼミの存続を願い、「岡部先生から頂いた課題にゼミ生全員で取り組み、岡部ゼミとして卒業したい」と口々に申し出たことに良く示されている。彼らは岡部ゼミの学生であることを誇りにしていたのである。経済学部は、その大きな担い手を一人失った。山田高生経済学部長のご依頼により、岡部教授ご逝去時の学部長として、謹んで追悼の言葉を綴らせていただいた次第である。

小学生のお嬢さん二人を残しての早すぎる旅立ちを、岡部教授はどれほど心残りに思われたことか。ご令室の悲痛なお気持ちは察するに余りある。今はただ、岡部教授の生前のご貢献に心より感謝し、み心の安らかならんことを祈るのみである。

平成五年七月

前経済学部長　上野　格